

北海道の児童文学の歴史を振り返る

柴村紀代

児童文化の黎明期

中央から遠く離れた北海道での児童文化の開花は、口演童話家の来道と各地の師範学校卒の教師を中心とした童話会の誕生であった。当時の新聞「北海タイムス」に巖谷小波が一九一三（大正二）年に来道し、小樽、札幌、函館で口演したことが書かれている。一九一九（大正八）年札幌に札幌師範学校卒の飯田広太郎や小野三男治が中心になって童話会「桃太郎会」が誕生している。今ではほとんど聞かれなくなった「口演童話」とは、子ども達に口頭で童話を語る催しで、娯楽の少ない時代に、子ども達の格好の楽しみであった。

1、北海道の児童雑誌

北海道の児童文学は児童雑誌から始まった。明治を代表する博文館の児童雑誌「少年世界」が創刊されたのが一八九五（明治二八）年だが、北海道でも明治時代に創刊され

た児童雑誌が二誌ある。旭川で発行された「少年の北海」（一九〇九（明治四二）年）と倶知安の「後志学の友」（一九一〇（明治四三）年）である。いずれも北海道の中心地札幌ではないことが興味深い。大正時代に入り、東京では「赤い鳥」（一九一八（大正七）年）や「コードモノクニ」（一九二二（大正一一）年）が創刊された。「赤い鳥」が道内でも読まれていたことは、入江好之の回想にも書かれているし、^{注1}「コードモノクニ」には、創刊号（大正一一年一月）に北海道の作家・森田たまが武井武雄の絵で「勘三郎ノ着物」という童話を書いている。^{注2}

その後、北海道でも「北海道小学新聞」（一九二二（大正一一）年）が札幌で、「函館では「函館の小学生」（一九二二（大正一一）年）が創刊された。二誌はこの期を代表する雑誌で、共に教育関係者の編集・発行のもと、小学生対象の学習読本的な色彩が強い。

戦後いち早く札幌で創刊された児童雑誌「北の子供」